

## 乳児の母親が行う調律的応答の個人差要因の検討 —母親が抱く子ども表象に着目して—

東京大学大学院教育学研究科 蒲谷 慎介

Factors determining the frequency of mothers' attuned responses: A two-pronged study on mother's representation of the child.

Graduate School of Education, The University of Tokyo, KABAYA, Shinsuke

### 要 約

近年、共感性といった子どもの社会情緒的発達を促進するものとして、母親が行う調律的応答に着目する立場が台頭している。本研究では、その調律的応答の個人差要因として母親が抱く子ども表象に着目し、以下の2点を検証した。①子どもが生後5ヶ月前後の時点で母親にインタビューを実施し、母親が抱く子ども表象の質および特性としてのマインドマインディッドネス(MM)を測定した。分析の結果、わが子のイメージをよどみなく産出できる(バランスのとれた子ども表象を持つと思われる)母親は、産出に困難感を示す母親よりも、乳児のネガティブ情動表出に対し、欲求および思考的な帰属を行いやすいことが示された。加えて、わが子のイメージをよどみなく産出できる母親は、感情的な帰属よりも欲求的な帰属を行いやすかった。②子どもが生後7ヶ月前後の時点で母子相互作用の観察を実施し、乳児の情動表出に対して母親が如何なる応答をするのかを検証した。その結果、わが子のイメージを容易に産出できる母親は、産出に困難感を示す母親よりも、乳児のネガティブ情動表出に対して「ポジティブ表情を伴った単純応答」および「ポジティブ表情を伴った疑問的応答」をしやすことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、子ども表象を核とした諸要因が調律的応答の成立をいかに支えうるかを論考した。

**【キー・ワード】 調律的応答, 子ども表象, マインドマインディッドネス, アタッチメント**

### Abstract

Recently, some researchers have been focusing on “mothers' attuned responses” as contributing factor in the development of children's socio-emotional abilities, including empathy. Consequently, this two-pronged study aims to investigate factors determining the frequency of mothers' attuned responses with particular focus on “mother's representations of the child.” The maternal representation and mind-mindedness (MM) of mother with 5-month-old infants were assessed through interviews. Statistical analyses revealed that compared to mothers with high difficulty in accessing their infants' images, mothers experiencing low difficulty (those with a

balanced representation of the child) made more “thought” attributions to the negative MM clips, and more “desire” attributions than “emotion” attributions. In the second phase, mothers’ responses to their infants’ emotional expressions were observed when the latter were 7 months old. Statistical analyses revealed that in response to their infants’ negative emotional the low-difficulty group produced more “simple responses with smiles” and “questions with smiles” than did the high-difficulty group. Based on these results, this article rethought factors determining or supporting the success of mothers’ attuned responses.

**【Key words】 attuned response, mother’s representation of the child, mind-mindedness, attachment**

## 問題と目的

これまでアタッチメント研究の領域では、主たる養育者の内的作業モデル(internal working model)が乳児とのやりとりの質に影響し、乳児はその相互作用の経験を積み重ねる中で、様々な感情面、認知面の発達を果たすとされてきた(e.g. van IJzendoorn, 1995)。換言すれば、養育者はこれまでの自身のアタッチメント経験を内在化し、それに基づきながら子どもと接する中で、子どもに情動の扱い方を自然と教え込む、という構図が想定される。実際、アタッチメント安定型の子どもは不安定型の子どもに比べ、場面に合わせた幅広い情動表出ができ(Cassidy, 1994)、心の理論課題の通過年齢が早く(Meins, 1997)、高い共感性を身につける(Kestenbaum, Farber, & Sroufe, 1989; Knight, 2010)といったことが知られている。

それでは、特にアタッチメント安定型の母子関係における具体的な何が、こうした子どもの社会情緒的発達に寄与するのだろうか。この点に関して、Fonagy et al. (2002)による一連の理論的考察は、母親が乳児に共感的に関わってやる「調律(attunement : Gallese et al., 2007)」の側面こそが、子どもの十全な情動発達に不可欠であることを示唆する。調律とは、乳児が泣きだしたりむずかたりした際、母親がそのネガティブな内的状態に巻き込まれ過ぎずに共感し、その情動についてのフィードバックをしてやることをさす。このようなフィードバックによって、乳児は今自身が感じている情動が如何なるものなのかを徐々に把握するようになり、自分でコントロールできるようになると想定される(c.f., Bion, 1967/2007)。

蒲谷(2013)は、これまで実証的知見が希薄であった調律の概念に着目し、実際の母子相互作用の中で、母親がどのように調律的応答を行うのかを、観察法を用いてボトムアップに検証した。その結果、安定傾向の内的作業モデルを持つ母親は、乳児の泣きやむずかりといったネガティブ情動表出に対して、「ポジティブ表情を伴った心境言及(例：泣いている乳児に対して、笑顔を浮かべながら「悲しいね」と語りかける)」を行いやすいことが明らかとなった。この形式の応答は、その性質からしてまさに調律的応答の一種であると考えられ、今後はその発達の意義を検証していくことが求められる。

しかし、そもそもこうした調律的応答が如何なる機序のもと生起するのか、その認知プロセスについては実証的検討の余地が多く残されている。本稿では、その核となる要因として、母親が抱く「子

ども表象」に着目する。子ども表象とは、換言すれば「子どもについての内的作業モデル」であり、母親が自身の子どもの性格に対して持っている認識、印象、考えのことを指す(Zeanah, 2000)。そして実際に、バランスのとれた子ども表象は、より良い母子相互作用の質と関連することが示されている(Vreeswijk et al., 2012)。特に調律的応答は、養育者が幼いわが子からの情動的シグナルを取り入れ、解釈し、フィードバックを行うという情報処理プロセスを踏むと考えられるため、その応答パターンには、まさにこの子ども表象の質が密接に関連することが予測される。本稿ではこの観点から、①バランスのとれた子ども表象を持つ母親が如何なる認知バイアス(特性としてのマインドマインデッドネス、以下 MM)を備えているのか、②バランスのとれた子ども表象を持つ母親は乳児の情動表出に対して如何に応答するのか、という2点の検証を通じて、調律的応答の生起要因を多角的に論考する。

## 方 法

### 1) 対象

本研究では、同一母子サンプルを対象に2時点の調査を実施した。[第1時点] 生後3~9ヶ月の乳児(平均5.6ヶ月)の母親36名(平均33.3歳)。乳児の性別内訳は女兒18名、男児18名、出生順は第一子16名、第二子17名、第三子3名であった。[第2時点] 生後5~11ヶ月の乳児(平均7.7ヶ月)とその母親31名。乳児の性別内訳は女兒16名、男児15名、出生順は第一子14名、第二子14名、第三子3名であった。

都内の複数の保育園に協力を依頼し、チラシを通じた募集を行った。調査参加者には事前に研究内容と方法について説明を行い、承諾を得た上で調査を実施した。調査は公民館の和室や保育室、または調査参加者の自宅にて実施された。

### 2) 母親の子ども表象：わが子のイメージ産出容易性の測定【第1時点】

母親の子ども表象の質を捉えるため、Zeanah et al.(1996)による Working Model of the Child Interview(WMCI)を援用した。インタビューの様子はICレコーダーもしくはビデオカメラで記録された。本研究では、母親間でその回答に明瞭な個人差が見られた二つの質問項目「お子さんの性格や行動の特徴を表すのにふさわしい言葉を5つ挙げてください」及び「お子さんとお母様のご関係を表すのにふさわしい言葉を5つ挙げてください」への反応の仕方に着目した。例えば、ある母親は5つの言葉をよどみなく産出した一方で、ある母親は5つ挙げ終わるまでの間に多少の困難感を呈した(「難しい」「5つも思いつかない」「例を挙げて欲しい」等)。本研究では、この個人差が子ども表象の質とある程度関連すると想定した。すなわち、もし母親がバランスのとれたオープンな子ども表象を抱いていれば、やや不鮮明もしくは偏った子ども表象を抱いている場合に比べて、子どものイメージへ容易にアクセスし、言語化できると考えられる。そこで試みとして、この「子どもイメージ産出容易性」を、子ども表象の質(バランス/アンバランス)を反映する観察可能で簡便な指標として用いることとした。具体的には、各質問に対して5つの言葉を挙げ終わるまでの間に、上述したような言語

化困難を訴えた回数をカウントした。さらに、5つの単語を挙げきらなかった場合には、産出されなかった単語数もカウントした。これらのカウントを総計したものを「子どもイメージ産出困難度得点」とした。

### 3) 母親の MM 測定【第 1 時点】

調律的応答は、情動の発信源である乳児の内的状態を母親側が推察することで達成されると考えられるが、母親が乳児に対してそもそもどれほど心的帰属を行いやすいのかという点に関しては、広範な個人差があることが指摘されている(e.g., 篠原, 2006)。そこで母親ごとに MM を吟味し、その個人差と子ども表象との関連性を検証するため、篠原(2006)に倣い、本研究の対象者ではない 12 名の乳児(女兒 7 名, 男児 5 名)とその母親の相互作用場面の映像データを素材として、5つのビデオクリップ(各 30 秒間)から成る共通乳児刺激を作成した。共通乳児刺激のうち、2つは乳児の情動状態がニュートラル(乳児がおもちゃ遊びをやめてカメラに迫る, 乳児がお目当てのおもちゃを目指してずり這いする), 1つは比較的ポジティブ(乳児が母親とガラガラで遊んでいる), そして残りの 2つは比較的ネガティブなもの(乳児が突然泣き出す, 乳児が母親に向かって突如不機嫌そうな発声をする)で構成されている。PC を用いて各乳児刺激を母親に 2 回ずつ呈示し、「映像中の赤ちゃんが、どんなことを感じたり、思ったり、考えたりしていると思いますか」と問い、その回答を IC レコーダーで録音した。

母親の回答の内、乳児の内的状態について言及した部分を抽出し、それらを感情(例:「音が鳴って楽しい」)、欲求(例:「何か話したいのかな」)、思考認知(例:「すごいでしょーって思ってる」)のいずれかに分類した。そして母親ごとに、内的状態への言及総数に占める各カテゴリの割合を算出し、MM の指標とした。

### 4) 質問紙による母親のアタッチメントスタイル及び乳児の気質の測定【第 1 時点】

母親が抱く子ども表象の質には、母親自身のアタッチメント来歴がある程度の影響を及ぼすとの指摘がある(e.g., Huth-Bocks et al., 2004)。そこで子どもイメージ産出容易性と母親自身のアタッチメントスタイルの関連性を検討するため、母親に ECR-GO(中尾・加藤, 2004)に回答してもらった。ECR-GO 得点は、アタッチメント回避(avoidance)及びアタッチメント不安(anxiety)の 2 次元について算出された。

また子どものイメージの産出容易性には、乳児自身の元来の行動的特徴が影響を及ぼすことも考えられる。そこで対象乳児の気質を捉えるため、母親に日本語版 RITQ(佐藤, 1988)に回答してもらった。本研究では菅原ほか(1994)の指摘に従い、日本人サンプルに RITQ を使用した際に見出された 7 因子構造を基に、6 種の気質得点(見知らぬ人や場所への恐れ, 味覚的敏感さ, 周期の規則性, フラストレーションへの耐性, 視覚的敏感さ, 注意の持続性と固執性)を算出した。

### 5) 乳児の情動表出に対する母親の応答パターンの解析【第 2 時点】

**観察場面** 乳児の情動表出に対して母親がどのように応答するのかを検証するため、母子相互作用

用の観察を実施した。観察場面は20分間で、自由遊び(7分半)、準母子分離(最大5分)、自由遊び(7分半)の連続する3フェーズで構成された。自由遊び場面では調査者が用意した共通のおもちゃ8点(ガラガラやボール等)が与えられ、母親にはいつもの通り子どもと接するように教示がなされた。準母子分離場面では、おもちゃを回収した上で、母親に乳児から3メートル離れた同室の所定の位置へと移動してもらい、そこで調査者が用意した雑誌を読んでもらった。この時、母親はその場所に留まってさえいれば、乳児と自由にやりとりをして良いこととした。母子相互作用の様子は2台のデジタルビデオカメラで撮影された。

**母子相互作用の解析** コーディングの方法は蒲谷(2013)に準じ、解析にはELAN 4.1.0を用いた。ビデオデータを基に、まず20分間の母子相互作用中に乳児が情動(ポジティブ/ネガティブ)を表出した箇所を全て同定した。その上で、乳児の各情動表出開始から5秒間の内に母親が行った応答をコーディングした。母親の応答は、表情について4種(無表情、ポジティブ、ネガティブ、誇張ネガティブ)、そして発声発話について6種(無反応、心境言及、会話的応答、疑問的応答、模倣的応答、単純応答)をそれぞれコーディングし、それを後に機械的に組み合わせることで、24の応答パターンに分類した。そして母親ごとに、各応答パターンの生起頻度が乳児の各種情動表出数に占める割合を算出した。

## 結 果

各解析はオープンソースの統計ソフトウェア環境であるR 3.0.2上で実行された。

### 1) イメージ産出容易性と母親のアタッチメントスタイルとの関連

イメージ産出困難度得点のレンジは0~13と広範な個人差が見られたため、得点が相対的に低い「イメージ産出容易群 ( $n=18$ , 平均得点 1.3)」と、相対的に高い「イメージ産出困難群 ( $n=18$ , 平均得点 7.1)」に二分した。

母親のECR-GOの回避および不安得点の平均は、それぞれ3.44( $SD=1.12$ ), 2.96( $SD=1.04$ )であった。この各平均点を基準とし、その相対的な高低の組み合わせから、母親を安定傾向(回避:低, 不安:低)、とらわれ傾向(回避:低, 不安:高)、拒絶回避傾向(回避:高, 不安:低)、対人恐怖的回避傾向(回避:高, 不安:高)の4群に分類した。このうち安定傾向群以外の3群は不安定傾向としてまとめられる(Mikulincer & Shaver, 2008)。

母親のイメージ産出容易性(容易群/困難群)とアタッチメントスタイル(安定傾向群/不安定傾向群)の関連を $\chi^2$ 検定で検証したところ、5%水準で有意な関連が認められた。そこで残差分析を行ったところ、安定傾向群ではイメージ産出容易群が有意に多く、イメージ産出困難群が有意に少なかった一方で、不安定傾向群では容易群が有意に少なく、困難群が有意に多かったことが示された(表1)。

また、母親のイメージ産出容易性(容易群/困難群)を独立変数とし、乳児の各気質得点(6種)を従属変数とした $t$ 検定を実施したところ、いずれの気質側面においても有意な群間差は認められなかった。同様に、乳児の月齢および母親の年齢についても、有意な群間差は認められなかった。また、イメー

ジ産出容易性と乳児の性別、および乳児の出生順(第一子/第二子以降)との連関を  $\chi^2$  検定で検証したところ、そのどちらとも有意な連関は認められなかった。

表 1 母親のアタッチメントスタイルとイメージ産出容易性の連関

	イメージ産出容易群	イメージ産出困難群
安定傾向群	8 ▲	2 ▽
不安定傾向群	10 ▽	16 ▲

▲ 期待値より有意に多い( $p < .05$ ) ▽ 期待値より有意に少ない( $p < .05$ )

不安定傾向群は、拒絶回避+とらわれ+対人恐怖的回避

## 2) イメージ産出容易性とMMの関連

MM 刺激の内、乳児の情動状態がニュートラル及びポジティブなもの(3 種)と、ネガティブなもの(2 種)では、それぞれにおいて母親の全体的な反応傾向が類似していたため、分析の際は「ポジティブ刺激」及び「ネガティブ刺激」としてまとめて扱った。

まずイメージ産出容易性を独立変数、ポジティブ刺激に対する各 MM 側面を従属変数とした Mann-Whitney 検定を実施したところ、感情、欲求、思考認知のいずれの側面においても有意な群間差は認められなかった。次に MM 各側面を従属変数とした Friedman 検定を実施したところ、有意な差が見い出され、その後の多重比較の結果、ポジティブ刺激に対しては、欲求的側面よりも感情的側面及び思考認知的側面への帰属が多くなされたことが示された(図 1)。

次に、イメージ産出容易性を独立変数、ネガティブ刺激に対する各 MM 側面を従属変数とした Mann-Whitney 検定を実施したところ、イメージ産出困難群は容易群よりも感情的側面への帰属をする傾向にあること、そしてイメージ産出容易群は困難群よりも思考認知的側面への帰属をする傾向にあることが示された。次に MM 各側面を従属変数とした Friedman 検定を実施したところ、イメージ産出困難群においては有意な群内差が見られなかった一方で、容易群は感情的側面よりも欲求的側面への帰属を行いやすいことが示された(図 2)。

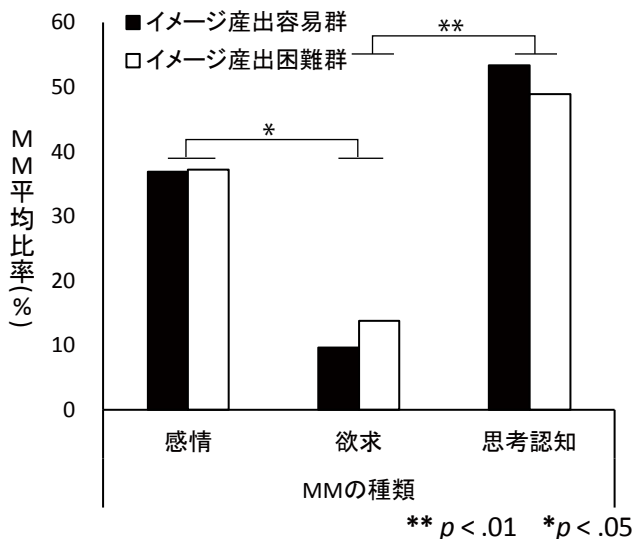


図1 ポジティブ刺激に対するMM

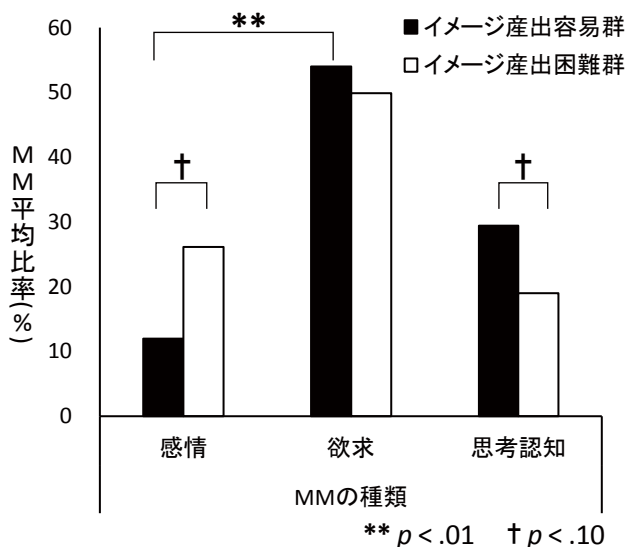


図2 ネガティブ刺激に対するMM

### 3) イメージ産出容易性と乳児の情動表出に対する母親の応答パターンの関連

乳児のポジティブ情動表出及びネガティブ情動表出に対する母親の応答パターンの分布は、図3および図4に示された。全体的な傾向として、乳児のポジティブ情動表出に対しては、母親は無反応(無表情+発声発話なし)であることは稀で、母親自身もポジティブ表情を浮かべて応答をすることが多かった。一方で乳児のネガティブ情動表出に対してはこのような表情マッチングはほぼ全く生じず、無表情のまま発声発話をする、もしくはポジティブ表情を浮かべながら発声発話をするといった形式で、多岐にわたる応答がなされていた。この傾向は蒲谷(2013)の結果と同様であった。

乳児のポジティブ情動表出に対する応答について、イメージ産出容易性を独立変数、各応答パターンの生起比率を従属変数とした Mann-Whitney 検定を実施したところ、イメージ産出容易群は困難群よりも「無表情のままの単純応答」を行う傾向にあることが示された( $p < .10$ )。乳児のネガティブ情動表出に対する応答についても同様の検討を実施したところ、容易群は困難群よりも「ポジティブ表情を伴った疑問的応答」を行う傾向にあること( $p < .10$ )、そして「ポジティブ表情を伴った単純応答」を行いやすいことが示された( $p < .05$ )。

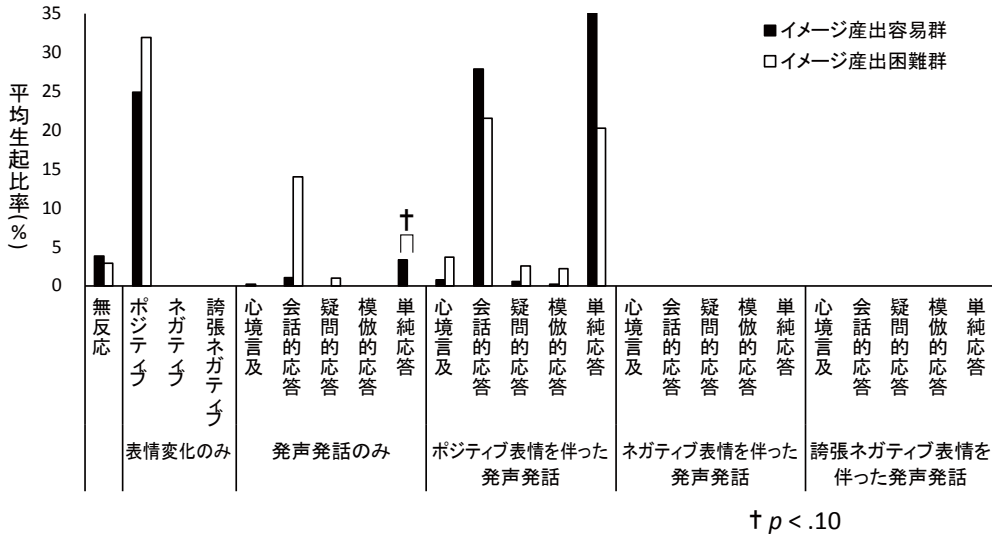


図 3 乳児のポジティブ情動表出に対する母親の応答パターン

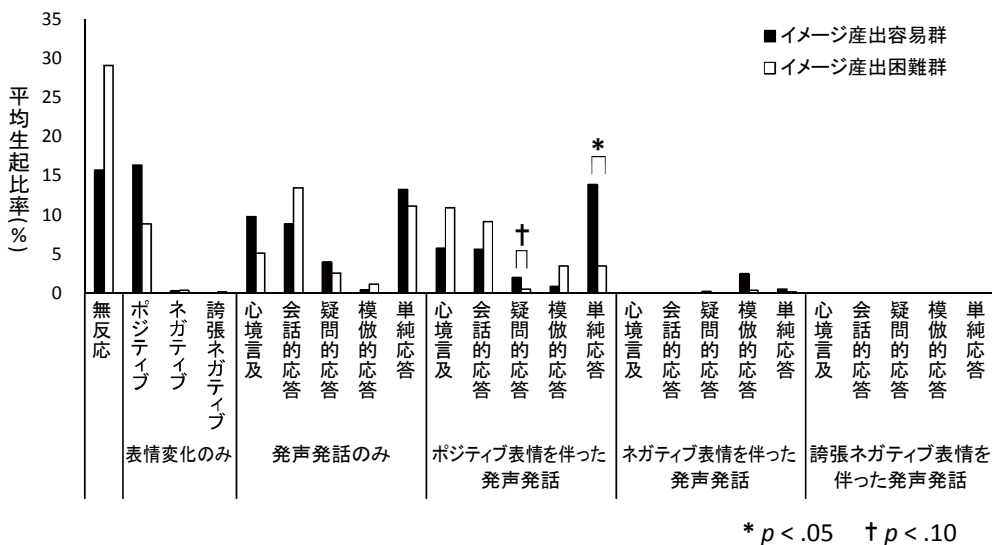


図 4 乳児のネガティブ情動表出に対する母親の応答パターン



## 考 察

**イメージ産出容易性は何を反映していたか** 今回、母親の子ども表象の質を反映すると想定した「わが子のイメージ産出容易性」が、乳児の気質や月齢、性別、出生順、母親年齢といった諸側面とは関連しなかった一方で、母親自身のアタッチメントスタイルとのみある程度の関連性を示したことは特筆すべきことであろう。この結果は Huth-Bocks et al.(2004)と軌を一にして、これまでの人生においてオープンなアタッチメント経験を積み重ね全般的に安定型の内的作業モデルを備えた母親が、幼いわが子に対して容易にアクセス可能な豊かな表象を構築しやすくなる、という過程を反映したのかもしれない。ただし、今回のサンプルでは乳児の月齢および母親年齢のレンジが必ずしも広くない上、言語化困難に寄与すると考えられる他の要因(インタビューという状況がもたらす緊張感等)については厳密な検討が欠けていたため、イメージ産出容易性が子ども表象の質をどの程度反映していたかについてはより慎重な解釈が必要であろう。

**母親の子ども表象と MM** ネガティブ刺激に対する母親の心的帰属傾向が、イメージ産出容易性の高低によって異なっていたことは、子ども表象と調律的応答との関連を吟味するにあたり重要な示唆となりうる。イメージ産出容易群が行いやすかった欲求的側面への心的帰属とは、例えば乳児が泣いているのを目の前にして、「抱っこしてほしいのかな」「かまってほしいのかな」などと想像することである。一方の感情的側面への帰属は、「寂しくなった」「悲しくなった」といったように、乳児が「泣いている」という表面的な様子から比較的簡単に描写できるものかもしれない。すなわち、欲求および思考認知的側面について乳児に心を見出すには、そのような表面的描写より一步深めて、今泣いている乳児の関心がどこに向いているのか、何をゴールとしているのか、といった夢想を巡らす必要があると考えられる。こういった観点に立つと、バランスがとれた子ども表象を持つ母親は、乳児の心的世界をより深く洞察するような認知的バイアスを備えていた、といえるかもしれない。イメージ産出容易性は母親自身の子どもについてのものであるが、MM の測定に用いたのは共通乳児刺激であるため、今回その片鱗が垣間見られた子ども表象は、まさに内的作業モデルとして対乳児認知を方向づけるということも考えられるかもしれない。

**母親の子ども表象が乳児の情動表出への応答に与える影響** 母子相互作用の観察からは、イメージ産出容易群は困難群よりも、乳児のネガティブ情動表出を目の前にした時に「ポジティブ表情を伴った単純応答」及び「ポジティブ表情を伴った疑問的応答」を行いやすいことが示された。前者は乳児の泣きやむずかりに対して、自身は笑顔を浮かべて「うんうん」「はい」「○○ちゃん」などと相槌的に応答するものであり、後者は同様に笑顔を浮かべて「なーに?」「どうしたの?」などと問いかけるような応答である。これはどちらも乳児の内的状態についての明瞭なフィードバックは含まないという点で、蒲谷(2013)で見出された「ポジティブ表情を伴った心境言及」に比べれば調律的ではないかもしれない。しかしそのような応答を行う母親の態度へと視点を移すと、示唆的な結果と受け取れよう。すなわちこれらの応答は、乳児の泣きやむずかりを受け流す「無反応」とは対照的に、乳児のネ

ガティブ情動に過剰に巻き込まれることなく(「笑顔を浮かべる」), それでいて乳児との対話を維持し(「単純応答」), その心的状態に関心を向ける(「疑問的応答」), という態度を反映した応答と言えるかもしれない。そのように捉えると, イメージ産出容易群が備える MM スタイルまで含めた一貫した解釈が可能となる。すなわち, バランスのとれた子ども表象を持つと考えられる容易群は, 乳児のネガティブ情動に対して欲求および思考認知的側面に関する心的帰属を行いやすいバイアスを備え, それ故に, わが子からのネガティブ情動シグナルを意味あるものと受け止め, いなすのではなく対話的に応じることができるのかもしれない。そして母親によるこうした足場かけの応答は, ネガティブ情動で混乱した乳児を落ち着く方向へと導き, 乳児に「自身の内的状態が他者を動かす意味あるもの」との直観を与えるのかもしれない。

**総括および今後の課題** 本稿では母親が抱く子ども表象が調律的応答に与える影響を吟味するべく, わが子のイメージ産出容易性という簡便な指標を用いた検討を行い, ある程度整合的な知見を得るに至った。しかし上述したように, 今回の手法では母親の子ども表象の質を捉えきれたとは言えず, それに伴い各知見も制限付きで解釈されねばならないだろう。また第一時点で捉えられた母親の子ども表象やアタッチメントスタイル, MM, および乳児の気質といった諸要因が, その後の乳幼児期に渡って調律的応答または調律的態度にどのように影響を与え続けるのか(あるいは影響が微弱となるのか)といった点については, 今後の縦断的検討で明らかにしていく必要がある。

## 謝 辞

お忙しい中, 本研究の調査にご協力下さいましたお母様方, お子さん方に深く感謝申し上げます。また本稿を執筆するにあたり, 東京大学大学院教育学研究科の遠藤利彦教授からご指導を賜りました。記して御礼申し上げます。

## 文 献

- Bion, W. R. (1967/2007). *Second thoughts*. London: Heinemann. / 再考: 精神病の精神分析論. 松木 邦裕(監訳) 中川慎一郎(訳). 東京金剛出版.
- Cassidy, J. (1994). Emotion regulation: Influences of attachment relationships. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **59**, 228–249.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York, Other Press LLC.
- Gallese, V., Eagle, M.N., & Migone, P. (2007). Intentional attunement: Mirror neurons and the neural underpinnings of interpersonal relations. *Journal of the American Psychoanalysis Association*, **55**, 131–175.
- Huth-Bocks, A.C., Levendosky, A.A., Bogat, G.A., & von Eye, A. (2004). The impact of maternal characteristics and contextual variables on infant–mother attachment. *Child Development*, **75**,

480-496

- 蒲谷慎介(2013). 前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答：母親の内的作業モデルおよび乳児の気質との関連. *発達心理学研究*, **24**, 507-517
- Kestenbaum, R., Farber, E.A., & Sroufe, L.A. (1989). Individual differences in empathy among preschoolers: Relation to attachment history. In N. Eisenberg (Ed.), *Empathy and related emotional responses. New directions for child development*, Vol.44 (pp.51-64). San Francisco: Jossey-Bass.
- Knight, R. (2010). Attachment theory: In search of a relationship between attachment security and preschool children's level of empathy. *The Plymouth Student Scientist*, **4**, 240-258.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. New York, Psychology Press.
- Mikulincer, M., & Shaver, P.R. (2008). Adult attachment and affect regulation. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (2nd d., pp. 503-531), New York, Guilford Press.
- 中尾達馬・加藤和生. (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. *九州大学心理学研究*, **5**, 19-27.
- 佐藤俊昭(1988). 子どもの気質の追跡研究：第 2 報・日本語版 ITQ-R とその使用経験. *東北大学教養部紀要*, **49**, 196-175.
- 篠原郁子(2006). 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発：母子相互作用との関連を含めて. *心理学研究*, **77**, 244-252.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則.(1994). 乳幼児期にみられる行動特徴：日本語版 RITQ および TTS の検討. *教育心理学研究*, **42**, 315-323.
- van IJzendoorn, M.H. (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the adult attachment interview. *Psychological Bulletin*, **117**, 387-403.
- Vreeswijk, C.M.J.M., Maas, A.J.B.M., & van Bakel, H.J.A. (2012). Parental representations: A systematic review of the working model of the child interview. *Infant Mental Health Journal*, **33**, 314-328
- Zeanah, C.H. (2000). Infant-parent relationship attachment. In C.H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health* (2nd ed., pp. 222-235). New York: Guilford Press.
- Zeanah, C.H., Benoit, D., Barton, M.L., & Hirshberg, L. (1996). Working Model of the Child Interview coding manual. Unpublished Manual.

